

会 議 録

附属機関又は 会議体の名称		豊島区図書館経営協議会（令和6年度第3回）
事務局（担当課）		文化商工部図書館課
開催日時		令和7年2月7日（金）午後6時00分～午後8時00分
開催場所		あうるすぽっと3階 会議室 B
議 題		（1）「にぎやかな公共図書館」の実現に向けて～施設整備を契機とする空間づくり、サービスのあり方を中心として〈地域コミュニティの拠点としての図書館について〉 （2）その他
公開の 可否	会 議	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部非公開 傍聴人数 0人
		非公開・一部非公開の場合は、その理由
	会 議 録	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部非公開
		非公開・一部非公開の場合は、その理由
出席者	委 員	稲井 達也、河本 毬馨、新井 裕、牧野 崇、酒井 由江、 野中 由香子、春日 美乃、尾花 宏子、数藤 沙綾、 渡辺 ひかる（オンライン）、武井 悦子、吉田 和夫 渡邊 圭介
	そ の 他	
	事 務 局	中央図書館長【図書館課長】 図書館課 管理係長、資料係長（点字図書館係長）、 サービス基盤係長、サービス基盤主査、 サービス運用係長 巣鴨図書館長、千早図書館長

審 議 経 過

No. 1

本会議初のオンライン会議実施。オンラインでの参加委員 1 名。
傍聴希望なし

【本日の会議について】

会長：ただ今より、第 3 回豊島区図書館経営協議会を開催する。
本日の会議について、まず議事について事務局から説明し、その後意見交換を行う。今回も自由闊達なご意見をいただきたい。

事務局： 本日の議題は「にぎやかな公共図書館の実現に向けて〈地域コミュニティの拠点としての図書館について〉」となっている。本区では地域図書館 2 館の改築改修を予定しており、施設整備を契機として新たな図書館への変革を図る。上池袋図書館の進捗状況については、2 月 3 日から休館し、2 月 6 日より豊島清掃事務所の 2 階に臨時窓口を開設した。千早図書館については、引き続き基本設計を進めている。前回は図書館のリニューアルに向けて、個人または家族、仲間同士の居場所としての図書館についてご意見をいただいた。

今回は、個としてだけではなく来館者同士、または来館者とボランティア、図書館員など他者とをつなぐ、図書館を交流の場とする地域コミュニティの場としての図書館についてご意見をいただきたい。また、前回の「居場所としての図書館」と今回の「地域コミュニティの場としての図書館」は非常に関連性の高い内容となっているため、引き続き居場所としての図書館についても含めてご意見をいただきたい。

会長：「地域コミュニティの拠点としての図書館」についてご意見をいただくにあたり、事務局から資料の説明をお願いしたい。

（事務局より資料 1 別紙について説明）

事務局：今回は、前回の居場所としての図書館を踏まえたうえで、「地域コミュニティの拠点としての図書館について（来館者同士、来館者と図書館員、スタッフ等との相互交流の場）」についてご意見をいただきたい。

現在地域コミュニティの形成が必要とされる背景としては、血縁や地縁をベースとした既存のコミュニティが崩れ、孤立・孤独の問題が顕在化している状況があげられる。特に豊島区では、高齢者の単独世帯割合が全国最高となっている。これに対し、区立図書館では他者との出会い・ふれあいなどゆるやかなコミュニティ形成、コミュニティ形成のきっかけづくりの場を目指す。地域団体や関係機関とのネットワークづくりにも努め、有効な企画、必要な情報発信・情報提供など、地域コミュニティ形成の一助となる場としていく。

（事務局より資料 1 について説明）

資料1を踏まえ、地域コミュニティの拠点として個人の点と点を繋いで線、そして面へとしていくため、利用者全体と各対象者別に何が必要か、交流を促す仕掛けづくりはどのようなものが考えられるかなど、ご意見をいただきたい。

会長：資料に記載されている項目別にお伺いしていく。まず、「共通」についてはいかがか。

委員：地域コミュニティの拠点づくりを目指していく中で、「地域団体や関係機関のネットワークづくりにも努め」とあるが、現状のネットワークづくりはどのようになっているのか。外部の機関や市民とどれだけ繋がっているかをお伺いしたい。

事務局：豊島区の場合、区民の1割以上が外国籍ということもあり、外国人支援団体や社会福祉協議会、生活困窮者の相談を受けているコーディネーター、日本語学習支援団体や当事者にニーズを伺いながら母語資料の選書や配架をし、本文に書かれている言語による見出しなどを付けている。また、一般資料についても、NPO団体との協力や学校図書館司書連絡会の定期的な開催など、各所のニーズを聞きながら選書に活かしている。

事務局：様々な関係機関の連携についてはまだ十分ではないため、強化をしていきたい。区の関係機関としては子どもスキップや区民ひろばに出向き、ボランティアの方が読み聞かせ等を行っている。また、小中学校、学校図書館についても、相互に連携をとりながらブックトークを行ったり、図書館に招いてご案内したりといったことを行っている。大学図書館についても本協議会に委員として加わっていただき、企業とは共催のイベント等も行っている。区民との連携としては読書団体があるが、最近はやや希薄なため、今後強化していく必要がある。

委員：団体との連携は既にある程度構築されているので、それをさらに強化していくということになるが、今後地域コミュニティの拠点づくりとして重要なのは、個々の利用者に対する図書館とのつながりだと思う。地域コミュニティの拠点として図書館があるなら、個々の利用者のことを知っているかどうかということが重要。プライバシーのこともあるのでむやみやたらに聞く訳ではないが、この人が普段どういった仕事をしているか、どういったことに興味を持っているかといったことを普段の日常業務の中で会話をしてある程度引き出したり、そこから発展して図書館でイベントを一緒に企画したりといったことにつながる。町レベルの図書館だと、図書館員と住民の仲が良く、お互いによく分かっているということがある。新しいイベントにつなげることで、仲良くなるということが今後必要になってくると思う。個人の利用者を利用者として見るのではなく、図書館と一緒に何かをしてくれる味方と思えるような関係づくり

が必要。

会長：最初に高齢者の一人世帯が多いという説明があったが、コミュニティづくりには高齢者福祉を担っている地域包括支援センターや地域のことをよくわかっている自治会や民生委員の方などとの連携も必要になってくる。話を伺って、図書館を通して孤立や孤独を防ぐといったこともできると感じた。

委員：豊島区は他の自治体の協議会と異なり経営協議会であるため、経営についても考えていかなければならない。地域コミュニティの拠点としての図書館を考えた時に、図書館のことだけでなく公共施設としての在り方を考える必要がある。そのためには、図書館が地域の魅力を持たなければならない。魅力のある誇れる施設になるためには、公共施設のモデルとなるような施設になると面白いと思う。例えば SDGs などと絡め、太陽光パネルを設置して発電した電力を近隣に提供する、といったことなどは話題にもつながり面白い。

会長：新しい図書館を作るうえで職員の意識改革は必要で、どんなに立派な施設を作ってもそこに努める職員の意識が伴わないと意味がない。本協議会は、利用者側の方も区側の職員も集まっている場なので、忌憚のないご意見をいただきたい。

委員：図書館職員の意識改革について、現状の図書館員は全員きちんとしていて交流する相手という印象が抱けていない。事務的な貸し借りをするだけの相手となってしまうので、地域コミュニティの拠点としてスタッフと交流するということを考えると、その人の人柄などが分かると交流がしやすいと思う。例えば、図書館員おすすめの本のポップが置いてあったりすると良いのではないかな。

委員：資料を拝見すると、元々交流をしている人へ場所を提供することが主のように感じる。豊島区の実態として孤独や孤立の問題が顕在化していることを考えると、一個人が図書館に来た時に、共通の趣味の本と一緒に読むといったようなことをコーディネートする人が必要。孤独や孤立を感じている人が、人を通して図書館へ行ってみようと思える図書館にしていけると良いのではないかな。

委員：豊島区の図書館にボランティアグループはあるかお伺いしたい。そういったグループを作るきっかけがあると良いと思う。高齢者や中高年がボランティアとして関われば、子育て世代や子どもに対するボランティアも行えるのではないかな。図書館はリタイア世代の利用が多いと思っていたが、データを見ると 20%以下だったので、高齢者も来やすい仕組み作りができると良いのではないかな。

委員：資料の区分に「○」「△」「×」「？」とあるが、「？」となっている部分については「検討中」など前向きに検討しているとわかる表現にしてもらえると良い。

委員：豊島区はコミュニティセンターや公民館のような施設との連携は行っているのかお伺いしたい。

事務局：豊島区での公民館としての施設に地域区民ひろばや地域文化創造館がある。地域文化創造館は主に生涯学習の場として団体利用が多くなっている。区民ひろばは講座などを行っており、子どもからシニア層まで幅広く来られている。このような施設と図書館との連携やすみ分けが重要と考える。今後図書館として、本のイベントだけでなく幅広く行っていきたい。その中で各施設と連携することでより強化していく。

会長：最近は複合施設の一部に図書館の機能を持たせることで、様々な住民が訪れるようになってきている。今回の新しい図書館にはそういった機能を持たせていくということだが、名称はコミュニティセンターというような名前でなく「図書館」となるのか。

事務局：複合施設は其中で多機能を果たせる一方で、周辺の施設との分断も想定される。千早図書館は当初複合施設に入る計画があったが、最終的に単館となった。今後の改築で複合化ができる図書館があれば、複合化も検討していく。

会長：図書館という枠組みの中で公民館としての役割を果たしていくということによっていか。

事務局：区の方針として決定しているものではないので、今回のご意見を踏まえ、今後枠組み自体も改めて考えていく必要があると認識した。

会長：続いて「子育て中の利用者」についてご意見をいただきたい。

委員：子育て世代同士の交流だけでなく、図書館員や他の世代との交流もできると良いと思う。例えば、資料にあるような選書講座についても、講座が終わったらすぐ解散ではなく、図書館員に絵本の選び方や子どもの読書について相談できる時間があるなど。また、よみきかせのあとにボランティアの方とお話できる時間があると良い。ボランティアの方は子育ての経験者だったり絵本にも詳しいので、気軽に話が聞けると他の世代との交流にもつながって良いのではないかな。

会長：幼稚園の先生や保育士も資格を取る過程で、絵本の読み聞かせ等の教育を受けていないため、日本の読書推進の空白地帯となっている。区内の幼稚園教諭や保育士向けに講座を開くことで、そこから広がっていくこともある。これは大きな課題で、困っている幼稚園の先生や保育士は多い。

委員：豊島区はブックスタート事業を行っているかお伺いしたい。

事務局：保健所で検診を受ける際に絵本を渡す事業を行っていたが、令和 4 年で終了し、今のところ再実施の予定はないとのこと。

委員：もし実施していたら図書館との連携の在り方があったかと思ったが、今後に期待する。

会長：続いて「小学生利用者」のコミュニティ形成に移る。放課後に 1 人で過ごしていたり、費用がかからず安全に過ごせる場所が少ないということが課題となっている。小学校によっては放課後教室のようなものが直営で設置されているところもあるが、そのあたりについて情報があれば教えていただきたい。

委員：登録制の子どもスキップが全校にある。しかしスキップの施設内がすでに込み合っていて密度が高い状況。校庭開放では一般の方と一緒に遊んだりしている。

会長：スキップに入れなかった子どもの行き場という課題もあるので、その点も含めてご意見をいただきたい。

委員：資料の事業案にボードゲーム大会や工作会などあるが、一人で過ごす子が多いからということで、これらを居場所づくりとして図書館で行うのは少し違うように思う。たとえば、知的好奇心をくすぐるような読書会や本を通したワークショップを行ったり、一人でも図書館にくと図書館員と本の話ができたりするような場があるととても良い。以前アメリカに滞在していた際、そこでは図書館は地域のコミュニティの中心となっていた。パソコンが置いてあり宿題や調べ学習をしたり、読書会が開かれたりしていた。読書会はだれでも参加でき、コーディネーターが参加者に本の感想などを出してもらいながら進めていた。こういったイベントが定期的に実施されていた。また、大和市の学校図書館を視察した際、ここだったら子どもたちは毎日来たくなるだろうと思える素敵な図書館だった。ハード面、ソフト面、そして人材がとても大事だと感じた。

委員：事業案に挙げられていることを実施するには、コーディネートする人が付くかどうか非常に重要。今後参加人数を増やしていくことを考えると、質的なものももちろんだが、ボードゲームのような幅広い人が参加できるものを行うのも一つの手だと思う。図書館はだれでも学べる場であり、情報センター機能をもっているなので、特定の学校との連携だけでなく、全校への働きかけが必要。

委員：町田市では小中学校の生徒たちがいつでもどこでもデジタル図書を使えるように進めている。本だけでなくデジタルの戦略もあるのではないかな。

事務局：23区の中で、デジタル図書のIDとパスワードを生徒に配付している区はいくつかある。瞬間的な利用はあるが、その後急速に減少しているとのこと。図書館の努力や学校の尽力によるところもあるが、使われているところは積極的に使って非常に順調な区もある。本区の電子図書館は指定管理館の実施事業だが、選書もしっかり行き魅力あるコンテンツとしていきたい。

会長：府中市の中央図書館職員によると電子書籍を全校に使ってもらえるようアカウントを配付していく予定で、パイロット校2校で実証実験を行い非常に良い成果が出たとのこと。さらなる工夫が両者で必要だと感じた。

委員：資料の事業案にワークショップや教室があげられているが、全体的に座学が多く、学校の授業に近い形式が多いように感じた。以前図書館タンテイという謎解き企画があり、実際に参加して本を使いながら自分で進められるのがとても楽しかった記憶がある。そういったイベントも加えてもらえると良い。

事務局：夏休みの時期に各館で子ども向けイベントを実施している。以前は全館で図書館タンテイという名前でやっていたが、現在は各館に任せているため図書館タンテイという名前がついているものやそうでないものもある。巣鴨図書館でも今年似たようなイベントを行った。それぞれの館で謎解きイベントのようなものを実施している。

千早図書館でも同様に小学生向けに実施していて、図書館タンテイという名前で行っている。調べ学習についても夏休みのサポートをしている。

会長：続いて「中学生高校生」のコミュニティ形成についてご意見をいただきたい。

委員：資料の事業案に書かれているビブリオバトルやイベントなどの機会があると良い。ボードゲームといったものも児童館や区民ひろばにあると思うが居場所としてのきっかけになると思う。中学生がどうすれば足を運んでくれるかを考えた時、中学生が

作った作品を展示したりすると行くきっかけになるのではないかな。また、課題になっていることとして、生徒たちが学習情報センターで放課後に司書や学生ボランティアと毎日学習をしながら楽しそうに交流している中で、教員間では使い方のルールが話題になっている。学習をする場所である一方で友達を待っている場となっている。そこが居場所となっているということでもあるが、会話ができるエリアと静寂エリアに分ける必要があり、どの割合で作るのが難しいところ。そのあり方によって小中学生の利用も変わってくるように思う。

スタッフとの交流のきっかけについては、その人の好きな分野、得意な分野をネームプレートに書くと会話が広がるのではないかな。

委員：事業案として、図書館員が持っている本の装備や補修のスキルを活かして、小中学生に本の修理講座のようなワークショップをやってみるのはどうか。普段利用者からは図書館スタッフの貸出返却の業務しか見られないため、他に様々な業務があることを伝えられ、将来図書館で働きたいと思っている学生に図書館の仕事を知ってもらえるきっかけとなると思う。

委員：中高生を図書館に呼ぶために効果があると思うのが、運営側に回ってもらおうということ。たとえばYA向けの図書館だよりを定期的に作ってもらおうといったイベントを企画しているところもある。友達がやっていたら一緒にきてくれる。海外でユースカウンシルというのがあり、図書館によく来てくれる子に声をかけて運営に参加してもらおうといったことをやっている。先ほどスペースの使い方のルールがあったが、武蔵野プレイスは地下1階の半分が中高生しか入れず、使い方のルールを利用者で決めている。学習のエリアやごみのルールを自分たちで考え、ポップも自分たちで作って、その空間に責任を持たせている。新しい図書館で専用スペースを設けられるのであればそういった方法もできると思う。

中高生向けとしては、職員にユースワーカーを入れるということも考えられる。ユースワーカーとして若い人がいると中高生も来やすくなると思う。

会長：大学によっては、職域を限って学生を雇用しているというところもある。豊島区でも実現できるのではないかな。

委員：河本委員の意見に賛成で、中高生の力を借りると良いと思う。荒川区に勤めていた時に、公共図書館でティーンズスタッフというのを募集していて、図書委員の生徒に紹介したところ3～4人が募集し、半年ほど月1回の会議に参加してビブリオバトルの実施について企画をしていた。当日も友達に参加しているからということで、多くの生徒が見に来てくれていた。中高生のアイデアや行動力を借りるのはとても有効だ

と思う。

会長：ゾーニングについてはどこの図書館も苦勞している難しいところで、大正大学では一部以外は中高生、一般、大学生の利用エリアを分けていない。時々盛り上がって大きい声になってしまう中高生がいて大学生が困っていることもあるが、そういったことも起こりうる事象として分かっている状態で使ってもらっている。利用者が主体となって考えることも重要だと思う。

委員：町田市で高校生が図書館を運営する会を作りボランティアで活動していて、関わってもらっている。以前勤めていた学校では指定管理館と中学校がつながって図書委員を中心に、隣の学校を巻きこんでビブリオバトルを実施するなど様々なことを行った。設備やコンテンツもあるが、場としての図書館として場を有効活用するということも重要だと思う。

会長：続いて「若年層（20代、30代）」についてご意見をいただきたい。

委員：利用者同士の交流を促す仕掛けづくりと、ボランティアとして若年層が参加するという点を考えた時に、図書館利用者が普段どのような仕事をしていて、どのような目的で図書館にきているのか、仕事のためなのか趣味のためなのかなど、学生は普段社会人の方と触れ合う機会がないので知ることができない。図書館がコミュニティの場所として機能したら良いと思う。

会長：中央図書館はビジネスコーナーがあるが、それを活かせるような情報があれば教えていただきたい。

事務局：中央図書館ができた時からビジネス支援図書館をテーマとしてきた。22時まで開館しており、都心勤めの方がこちらに立ち寄り調べ物をしたり本を借りたりといった多岐の目的を想定していた。一方でビジネスなんでも相談という、企業やビジネスに関する相談についても根強く行っている。現状は固定化しており個に特化しているため、今後はそれを広げてコミュニティとして関係性を作れる可能性もあると感じている。

委員：若年層はなかなか本を読む習慣や時間がない様子だが、大学では興味のある講演会や勉強会には人が集まっているので、興味が湧くような企画があると良いのではないかな。また、SNSは必要不可欠な世代なのでそのあたり工夫も必要だと思う。

委員：居場所としての図書館について年齢層が幅広く語られているが、色々な世代に来てもらいたいのか、特に若年層にターゲットを絞って利用してほしいと考えているのか、ターゲットについて教えていただきたい。

事務局：個人利用とコミュニティとで違いがあると考えている。個人利用では貸出数でみるとYA世代（13歳～19歳）が特に少なく、高校生は小学校低学年の10分の1まで減少している。全体でみると、この5年間で全体の貸出数が6%減っている中で、YA世代は25%減っている。若年層の利用を特に推進していく一方で、コミュニティの場として、居場所として様々な悩みにこたえられるようなオールラウンドな図書館を目指していきたい。

委員：若年層はターゲットとして一番難しいところで、アウトリーチをかけると良いのではないかと。例えばSNSやショート動画など、若者たちにつながるようなメディアを活用するという手がある。一度バズると面白いことができるのがその世代だと思う。また、AIが使える図書館というのもこれからは考える必要があるかもしれない。

会長：後者については情報センターとしての図書館の機能になるが、AIがあることで利用が増える面もあると思う。

つづいて「シニア層」についてご意見をいただきたい。

委員：俳句会や街歩きイベントを実施されているが、終わったものの成果物などは作成しているか。

事務局：今年度、ボランティア団体と協力して大塚エリアの街歩きイベント行った。地図や大塚に関するブックリストを配付したり、終了後のアンケートをまとめて次回への参考にしたりはしたが、外向けに実施報告までは行えていない。

委員：Wikipediaタウンという、地域の文化などWikipediaに詳しく載っていないことを調べて載せようという図書館のイベントがあり、広がってきている。街を歩き、かつ図書館の地域資料を使って参加者たちがその地域のWikipediaのページを作るというもの。そういったものでなくても、たとえばZINEのようなものを成果物としてつくったり、俳句会であれば作った俳句を集積して蓄積したりするなど、次につながる、参加者がまた行こうとおもえる仕組みがあると、参加者同士の交流につながっていくのではないかと。

関連して、まちの記憶を保存しようというデジタルアーカイブが様々な地域で始まっている。市民の方が持っている写真をデジタル化し図書館に集積して、サイトを作

り、記憶を保存していこうという取り組み。長く住んでいるシニア層の方は資料や情報をたくさんお持ちなので、そういったものを集積すると面白いのではないかな。

事務局：以前地域研究ゼミナールというものがあり、コーディネーターが入って発表していただくようなことをやっていたが、コロナ禍で一時休止し、その後事業の見直し等により現在は実施していない。

アーカイブについては、今お話しいただいたようなものを区の広報課で作成している。

会長：城北大空襲を記憶として残しているNPOが豊島区内にあり、区とも連携しているようなので、そういったつながりは本区では持っていると思う。

委員：健康企画として、図書館に歩いて行こう企画はいかがか。図書館へ歩いて行くと映画会に参加でき、その映画の関連資料の貸出や、司書からおすすめ本を聞けるといったもの。シニア層は活字が得意な世代なので、アイディアで呼び込む作戦を練ると良い。

会長：鳥取県立図書館が病気関連の本を多く集めたところ利用が増えたということがある。活字世代へ必要とされる情報が揃っていれば、呼び込むこともできるのではないかな。

中高生の深刻な課題やシニア層の将来不安などは図書館が担える部分と、社会福祉部署へつなげなければならない部分とあるが、困っている方がいた時に声かけられるのか、つなぐ仕組みがあるのかをお伺いしたい。

事務局：図書館職員の中には福祉の部署を長く経験した職員もおり、そういった職員が声かけをしたり、指定管理者が運営している図書館でも気になる子どもがいる場合は区直営の図書館へ連絡が入るので、そこから関係部署につなぐということをしている。

委員：豊島区にはとしまコミュニティ大学があるが、図書館との関係はあるか。

事務局：中央図書館報の図書館通信に、としまコミュニティ大学のマナビト生に書評を書いていた。

委員：狛江市には狛江市民大学というのがあり、年間19回程度実施している。市民が講師を決めており、シニア層を中心に非常に人気となっている。こういったシニアの方たちが自分で企画し、運営するというものがあると良いのではないかな。

また、シニア層については読書バリアフリーとのつながりもでてくるので、大活字本やマルチメディアデイジーを活用なども検討すると良いと思う。

会長：立教大学ではセカンドステージといった取り組みをされているが、そういった知見から情報があればお伺いしたい。

委員：セカンドステージは50歳以上の方を対象として運営している。そういった方々の大学図書館利用が多く、レポートの相談なども受けている。シニアの方々の積極的な姿勢を見て、学生も刺激を受けている様子が見られるので、区立図書館でもそういった相乗効果が起こるような仕組みがあると良いのではないかな。

委員：コミュニティ大学は生涯学習として実施しており、シニア層が多く、コミュニティ大学を卒業するとまた自主的に講座を実習して区民の方たちを巻き込むという流れができています。興味のある分野で活動されているため、万遍なくというわけにはいかなが、図書館との連携も取り組みとして可能性があると思う。また、区内にある地域文化創造館は図書館とは違った居場所づくりをすすめていくこととなっている。子どもから大人まで幅広い世代が集う区民ひろばや地域文化創造館、図書館が連携しながら良いところを探し共有していく。図書館を核にして、利用者がそれぞれの施設で活動したり、職員が出向いて講座を行ったりと、今後の展開として検討の余地があるので、いただいたご意見を参考にしていく。

会長：続いて「障害者」のアクセシビリティについてご意見をいただきたい。

委員：現在点訳ボランティアとして活動しており、さらに多岐にわたる本を点訳していきたいと思っているが、利用者からリクエストがあればそういった本も点訳を行いたい。

会長：仙台市立図書館にメディアテークという図書館があり、障害者サービスに非常に力を入れていて、はっきりとわかる形で展開していた。多様性とにぎやかな図書館を謳っていくうえで、こういったことはしっかりと対応していく必要がある。

委員：ソフト面で「支援者向け・関係者向け研修」とあるが、障害のある方と実際に関わっていない人でも支援については誰もが知っていて良いことだと思うので、対象者の枠を広げて手話の講習を行うなどの取り組みを広げても良い。

会長：最後に「日本語を母語としていない方」へのサービスについてご意見をいただきたい。

委員：現在、全 4 回のバリアフリーサポート研修会を受講しているが、読書バリアフリーを中心として全体のバリアフリーについて研究・考察している。国立国会図書館では「みなサーチ」というものをしていて、障害のある方が利用できる。障害があるということを個人のバリアと考えず環境や社会のバリアとしてとらえ、例えば著作権をフリーにして点字やマルチメディアデイジーにしたり、外国人が自分の言語を活かしたりといった方法を見出せると、次のステージに進めるのではないか。

会長：館内のサインも含めて「やさしい日本語」を用いる動きなどはあるか。

事務局：利用者がよく使う目立つところに「やさしい日本語」で館内表示をおこなっている。カウンターの貸出、返却、利用者カードを作成する場所に「やさしい日本語」を表示している。また、豊島区には 130 以上の国の出身の方が住んでいるため「ようこそ」「ありがとう」「こんにちは」といった言葉を約 80 言語で表し、「図書館は全ての言語を大切にします」、というメッセージとして図書館の壁に掲示している。さらに「あなたの言語が見当たらないときは教えてください。その言語の本を提供します」といったポスターも掲示ご案内もしている。また、図書館の利用カードを作る案内は「やさしい日本語」を含めて 9 言語で作成をしている。

会長：同時通訳のデバイスはまだ設置されていないか。

事務局：現在はまだ無料の翻訳アプリを使いながら、やさしい日本語と身振り手振りで対応している状況。

委員：多言語の「ようこそ」「ありがとう」が貼ってあるのを見て、とても良いと思った。先ほどお話があったお互いの言語を教え合うものとして、海外の移民の多い地域の図書館では Language Café というイベントが行われている、主に言語を教えながら、その地域に住むときに必要な知識（ゴミ出しルールなど）を地域の利用者と新しく来た人で一緒になって教えるというもの。そのため、日本の図書館でも同様のことが行われるのは自然なことだと思う。

また、外国語を学びたい日本人も多いと思うので、そういう方たちと繋ぐような仕組みが図書館でできると良いのではないか。外国人は日本人以上に困っていると思うので、何にこまっているのか、ニーズをすくい上げることも重要。

会長：ネット上では外国人に対する差別や偏見の情報があふれているので、外国人サービスを行うということはそういった差別や偏見と闘うということになる。ぜひ覚悟を持って貫いていただきたい。本当に厳しい状況の方もいるので、包括的な図書館を目指していただければと思う。

審 議 経 過

No. 13

委員：清和小学校では先月だけで3名の中国人の転入生がおり、うち2人は日本語がわからず、そのうち1組はご両親も含めて日本語がわからないというご家族だった。先ほどお話があったように学校の図書館と地域の図書館がつながる仕組みがあると良いと思う。学校図書館には英語の本はあるが、80言語もの本はおいていないので、「地域の図書館へ行くとあなたの国の本が読めますよ」ということを学校司書から紹介したり、図書館から教員へ情報をいただけると良い。日本に初めて来る子どもは不安でいっぱいだと思う。学校図書館と地域図書館をつなぐことで、子どもだけでなくそのご家族にも知っていただけるのではないかな。

事務局：毎月学校図書館司書連絡会を行っており、外国語の本やマンガ、初学者向けレベル別日本語多読本の紹介をした際に、大変興味をもっていただいた。その時に学校司書が求めている言語の本を借りていき、学校図書室に置いて日本語がわからない生徒に読んでもらっている。学校図書館で外国語の本を収書するのは大変なので、今後も中央図書館が日本語以外の言語資料のニーズをすくい上げて学校図書館への貸出を行う。

会長：多くの忌憚ないご意見をいただいたので。今後の図書館経営に役立てていただきたい。

では、その他として事務局より報告事項をお願いしたい。

事務局：図書館システム更新に伴うサービスの拡充について4点報告する。1点目は図書の予約上限数を20冊へ引き上げ。2点目はスマートフォンでマイページにログインしバーコードを表示することで、利用者カードとして利用可能となった。3点目はホームページの資料検索画面への書影表示。4点目はマンガセットの順番予約が可能となった。

会長：最後に連絡事項はあるか。

事務局：令和7年度の組織改正について連絡する。本区の図書館組織については、文化施策を一体的に推進する目的から、平成20年4月から地方自治法180条の7の規定に基づき、区長部局の補助執行の形式をとっている。令和7年4月の組織改正で補助執行を終了し、教育委員会の所管となる。これに伴い、当協議会についても区長部局の附属機関から教育委員会の附属機関に改めることとなる。条例改正が必要となるため、豊島区議会第1回定例会へ上程している。審議、議決後4月1日から施行予定。現在委嘱されている委員の皆さまの任期については、改正後も従前の例によることとなっている。

審 議 経 過

No. 1 4

会長：次回の協議会日程について連絡をお願いしたい。

事務局：次回の開催は来年度の予定で、人事異動も挟むことから、新年度に改めて開催日調整のご連絡を差し上げる。

会長：以上で第3回図書館経営協議会を終了する。

会 議 の 結 果	・地域住民、学校、団体、区の他部署との連携を強め、多様なニーズに応えられる図書館として、今後の図書館運営の参考とする。
提出された資料等	資料1…地域コミュニティの拠点としての図書館について